

WACCA

MONTHLY REPORT

2022.8 VOL.9

8/5 夏休みWACCA実験教室

今回のテーマは、「色はどこから??」でした。
小学生の子ども6人が参加して、まずは「動物〇×クイズ」から。

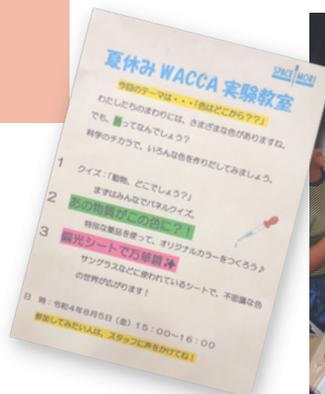


パンダやクリオネまで
出てきたけど、ハリネズミは
出番なしでした。(残念)

次は、いろんな薬品でオリジナルの色作り。
砂糖・塩・クエン酸・重曹の水溶液に、
酢やアンモニア水・パタフライピーの液体を
混ぜ合わせて、BTB液などを落とすと…
おや、ビックリ！ピンクや青や緑色に…

青ばかりを作る子や
鮮やかな赤色や黄色、
ブクブクと泡を
吹かしている子も…

太陽に向けると
スタンドグラス
のように
輝いて見えます。



化学反応で色を作り出す作業は子どもだけでなく大人も楽しくて、
子どもの手助けで参加していたお母さんも本気になっていました。
持って帰る色を5色選ぶときも、みんな真剣に悩みました！
本当に楽しく賑やかな実験教室でした。

最後は、偏光シートを使った万華鏡づくり。
作り方は簡単で、紙コップに偏光シートを二重にして片方に
セロハンテープを貼るだけです。
しかし、テープを光に透かして中を覗くと、赤、緑、青など
様々な色が見えては消える、何とも不思議な万華鏡ができました。
テープを貼れば貼るほどに、複雑な色が見えてくるので、終
了時間になってもテープを貼ったり、みんなで出来ばえを見
比べたり…と、子どもたちの笑顔があふれる時間でした。

水槽だより



めだかたちは恋と産卵の季節

シンママさんに聞いてみました



夏休みならではの苦労って？



子どもが「せっかくの夏休みまで学童だなんて」としょんぼりしていました。学童は働かなくてはならない親にとって大切な味方なのですが、子どもの気持ちもわかるのが辛いところでした。

休みの日も、ひとり親でコロナなどにかかるると身動きが取れなくなるので、外出にはとても気をつかいます。

給食がないので昼食の負担も増えましたが、パントリーの食材のおかげで献立のバリエーションが増え、子どもが喜んでくれるのが嬉しかったです。

WACCA 小さな読書会



『ピップとちょうちょう』

こどものとも 1956年4月号

与田 準一 作 / 堀 文子 画



<感想>

堀文子氏と言え、多種多様な花を描いた一緒不住の日本画、あるいは心に染み入る随筆集を思い浮かべる方が多いと思いますが、こんな可愛らしい絵本も描いていたのです。

『こどものとも』は、今では年代別・テーマ別に毎月たくさんさんの絵本を出版していますが、その創刊号を飾ったのが、当時37歳の堀氏の作品でした。

全てのページが、主人公の心情に合わせて背景までしっかりと描かれていて、絵本の絵が単なる挿絵ではなく、1枚の絵画としても鑑賞可能な作品となっていて、『こどものとも』を通して作品が紹介されていた絵本が、多くの人に受け入れられるようになったキッカケと言えるかも知れません。

「文」のサインは日本画の花押のようで、この作品の全てのページに描かれているのを見ると、堀氏の気合いの入れっぷりが感じ取れます。

ただ、ピップ坊やの視点では、蝶は「ちょうちょーさん」または「ちょうちょ」であり、「ちょうちょう」は町長を意味しているのに、タイトルが『ピップとちょうちょう』となっていたり、英訳のタイトルが『PIP AND A BUTTERFLY』と書かれているのはご愛敬ですが、堀氏の絵には多くのファンがいて、1989年に復刻版が発行後、重刷されたというのも納得です。

<内容>

ピップ坊やは蝶を探して、水や土筆、アヒルや水車に教わりながら、うつくしがはらにやってくると、そこは蝶がいっぱい。でも、ピップが蝶を捕まえると、蝶はぐったり動かなくなり、ピップの心臓は「どっきん」と鳴り、空も薄暗くなりました。そこで慌てて蝶を空に返してあげると、空は明るくなり春風が戻ってきたのでした。